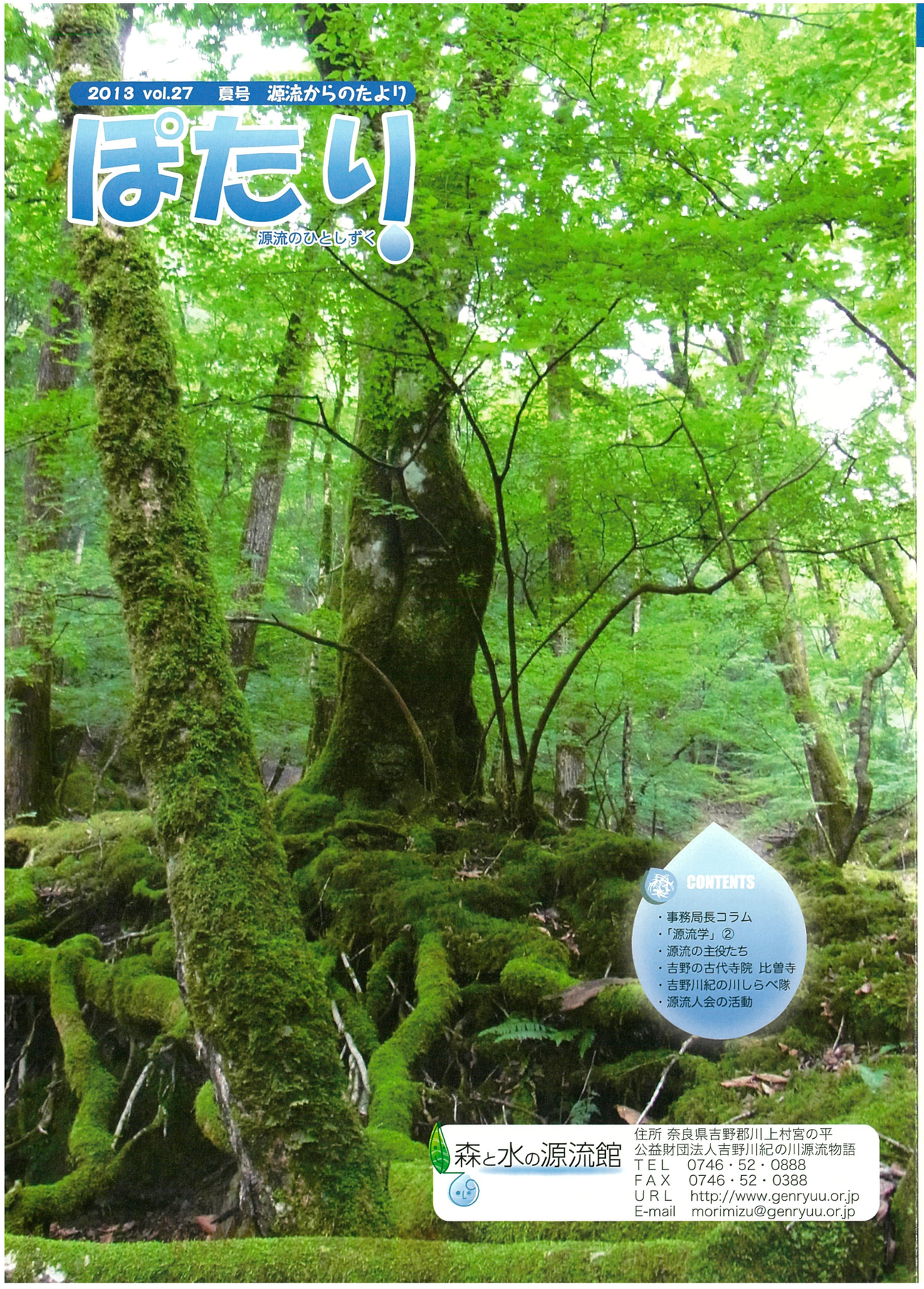


2013 vol.27　夏号　源流からのたより

ぽたり

源流のひとしずく

CONTENTS

・事務局長コラム
・「源流学」②
・源流の主役たち
・吉野の古代寺院 比曽寺
・吉野川紀の川しらべ隊
・源流人会の活動

森と水の源流館
住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
公益財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL　0746・52・0888
FAX　0746・52・0388
URL　http://www.genryuu.or.jp
E-mail　morimizu@genryuu.or.jp

源流人会の活動 森守セミナー報告

森づくりの体験や遊びを通じて源流を守り、育てる活動を行う「源流人会」のつどい「森守セミナー」が5月12日、源流学の森で開かれ、9名が参加して、今後の活動について意見交換を行いました。新緑の森の中で参加者のみなさんが源流人会へ参加した経緯や、活動への思いなどを語り、有意義なひとときとなりました。ほんの少しですが、ここでは皆さんの活動への思いを紹介します。

N・Yさんは「テレビで偶然に三之公を知り、美しい自然を見ました。今まで信州へ行っていたのですが、近くにこんなに素晴らしい自然があることを知り、川上へ来るようになりました」。

T・Tさん、T・Sさんご夫妻は「今まで川上村はスギやヒノキしかないと思っていましたが、筏場の自然の美しさに感動し、源流人会の会員となり活動に関わるようになりました。7、8年前、伐採でまったく木がなかった場所に、どんどん木が育っていく姿を見て、自然の素晴らしさを感じています」。

F・Mさん、F・Jさんご夫妻は「広い村有林と美しい原生林に感動しました。またその一方で伐採された所があり、何とかしないといけないと思っています。私たちが住む生駒にも吉野川の水がきていて、水源でつながっています。水をいただいていると自覚した上で水源の森を維持していきたいと思っています」。

K・Hさんは「別の活動で辻谷さんと知り合い、その技を若い人たちに伝えるお手伝いができたらと源流人会の活動にも参加するようになりました。後南朝の歴史など、知れば知るほど川上村の歴史の深さに興味を覚えます」。

N・Yさんは「昨年は源流館や達ちゃんクラブなどいろんな行事に参加し、自然の中に入れば入るほどその魅力にはまっています。源流の下流の和歌山市に住む者として、和歌山市民の森づくりにも参加しましたが、お互いどのような協力ができるかを考えています」。

T・Yさんは「海が好きで10年沖縄へ通っていました。ふと海が元気でいるには山が元気でなければならないと思い、山に関するボランティアに関わるようになりました。6月から川上村の地域おこし協力隊として村に移住し、活動を始めますが、都会の人たちに山のことを伝えていきたいです」。

N・Tさんは「都会では人間関係が希薄になっていくなか、ここには助け合う心や生きていくための技術など、日本の人々が幸せに暮らすヒントがあり、農山村の暮らしが日本の在り方でないかと思っています。辻谷さんに林業のことを学んでいきたいと思っています」。

参加のきっかけはさまざまでも、源流に魅了され、活動に取り組んでくださっています。

（コミュニティーライター：西久保智美）

源流人募集

源流人とは
かけがえのない水を生む
源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です

源流人会とは
集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、
参加し、喜びを分かち合いながら、
源流を守り、育ててゆこうとする会です

ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください

年会費
個人　2,000円
家族　3,000円
学生　1,000円
団体　10,000円

郵便振替 00940-1-331163

水源地の森守（もりもり）募金 にご協力ください

ありがとうございました。
平成24年度、378,937円の森守募金をお預かりしました。
奈良県内すべてと、和歌山県内の紀の川流域市町村の小学4年生全員に配布した教材印刷費や源流域での斜面崩壊対策費用にあてさせていただきました。
今後ともご支援をよろしくお願いします。

郵便振替 00950-2-331164「水源地の森守募金」あて

「表紙の写真：雨に濡れる吉野川源流－水源地の森。
苔生す森が水を大地に蓄えていきます。」

発行日:平成25年7月発行
発行所:公益財団法人吉野川紀の川源流物語　森と水の源流館
TEL:0746-52-0888

半世紀にわたる時をかけ、大滝ダム竣工。あたらめて私たちの役割を思う。

公益財団法人　吉野川紀の川源流物語　事務局長　尾上　忠大

昨年度（平成24年度）は、何度も「節目」という言葉を用いましたが、その最後にあったのが、大滝ダム竣工式典です。「森と水の源流館とダム?」と首をかしげる人もいるでしょう。しかし、川上村では、樹と水と人の共生を掲げる「水源地の村づくり」において、ダムとともに生きるという覚悟を示しています。したがって、私たちの役割においても、このダムの竣工を機に、これまで以上に伝えていくべきことがあると考えています。たとえば、「コンクリートのダムだけでは、安定して、きれいな水を流域へ届けることはできない」「健全な緑のダムのはたらきを守ろう」緑のダムとは、言うまでもなく森のことです。水の大切さと、森の役割を伝え、流域のみなさまといっしょに、これを実践していく私たちには、もっともっと深い考えと、活動が、ダムが動きだした今からこそ、求められてきます。みなさまといっしょに取り組んでいきたいと思います。

そんな決意をもって、3月に挙行された竣工式典でも、少しお手伝いをさせていただきました。式の終盤で『ふたつの龍のはなし』という語りとピアノライブをコーディネートしました。ダムという大きな事業に揺れ動きながらも、それを受け入れ、いつまでも山と水を守り、育てる、龍神さんと村人のお話です。

（以下　物語より抜粋）

山に木を植え、育て、それを伐って暮らしてきた村の人々は、山を大切にすることが、水を守ることだと、よく知っていました。村では、遠い昔から、水の神様である龍神様がまつられ龍神様のおしえをよく守り、自然に感謝をして暮らしてきました。

そのうち、川下にだんだんと人が増えると、田んぼや畑が広がり、たくさんの水を引くようになりました。

でも、ときどき大きな台風がきて、川の水があふれ、畑や田んぼが流されたり、大水に家がつかることがありました。川下の人たちは頼みました。川の水をせきとめて、大水が出ないようにしてほしい、雨のふらないときには、ためておいた水を流してほしいと。

村の人々は、なんとかしてやろうと思いました。でも「川の水をせき止めて湖を作ったら、大切にしてきたものが、みんな沈んでしまう。龍神さんも沈んでしまう。どうしたらええんやろ」

龍神様は言いました。「私は、よろこんで湖の底に沈もう。その水を、川下の人々のたくわえにするがよい」「私の体をふたつにしよう。ひとつは山に移して、おまえたちの暮らしを見守っていこう。」龍神様は、川の底に体を横たえました。川の水がだんだんとたまって、やがて深い湖になりました。

七夕の夜、村の人々は山のお宮さんに集まり、みんなでかがり火をたきました。湖の龍神様は、その明かりをめざして、山にのぼっていきました。村の人々は、今もふたつの龍神さまに見まもられて、山を大切にし、水を守りながら暮らしています。

そして最後に、この日のためにつくった『源流の郷』という歌を川上中学校の生徒とのコーラスでお披露目しました。

（以下歌詞）

山肌に芽吹く 木々の膨らみは
やがて 春の生まれる音になる
小鳥のさえずりは 時を告げ
命の水が 流れ出す
神々の宿る この郷の
恵みと苦難の　悠久の歴史
今 新しいページを開く
未来を照らす 光となれ
源流の郷に生まれ
源流の郷に生きる
命の水を育て
命の水を守る
祈りは天をさし
哀しみ 湖（うみ）に沈め
未来に願うはただ 人々の幸せ

（作詞・作曲／　山川亜紀）

この物語と歌にこめられた思いを大切に、命の水を守り、育てる水源地の未来をつくる一員としてこれからも邁進してまいります。

最近、お隣の中国で話題のＰＭ２．５（微小粒子状物質）問題以降、日本でも大気汚染の問題が大きく取り上げられる機会が増えました。日本でも１９６０－７０年代にかけて、四日市ぜんそく、光化学スモッグ、酸性雨など大気汚染問題が深刻な時期がありました。その原因物質は硫黄酸化物（ＳＯｘ）や窒素酸化物（ＮＯｘ）などです。汚染物質の程度については、機械などで測定することもできますが、お金もかかって大変です。そのため、生物を指標に判定する方法が研究されてきました。生物は大気や水の汚染でその生存が制限されてしまいます。機械などで調べると測定する検査項目においては詳しい汚染濃度を測ることができますが、生物は普通、様々な汚染物質の影響を受けているので、一つの項目だけ調べても全体像は明らかになりません。生物を指標とした調べ方は、詳しい数値はわかりませんが、汚染のおおよそのレベルを判定することができる点で優れています。

今回の吉野川紀の川しらべ隊では、近鉄吉野駅付近で、大気汚染の指標となるコケをしらべてみることも一つのテーマとしてみました。

5月6日に近鉄吉野駅に集合し、参加者17名で、吉野山へ続く七曲の坂の入口付近までのコケを調べました。その結果、駅周辺のサクラの樹幹にはサヤゴケ、ナガハシゴケ、コモチイトゴケ、コハイゴケが見つかりました。これは表1に当てはめるときれいな方から2番目の区域Ⅳに相当し、ＮＯｘ換算で０．０１－０．０２ｐｐｍ（年平均）に当たりました。少し歩いて七曲の坂に入ると、エゾヒラゴケやスズゴケなど、表1には出てこないような大型の森林性の種が多く見られました。つまり、大気汚染判定では区域Ⅴ以下の汚染濃度にあたります。微妙な距離の差でしたが、横を自動車が行き交う駅周辺と、少しではあっても木々に囲まれた空間で大きな差があることがわかりました。こうして、生物を通して、環境を視覚的に見ることができます。身近な環境、例えば学校の校庭などのコケでも可能なプログラムですので、ご活用いただければと思います。

コハイゴケ
葉はかま型で、長さ 1.5-3mm。

ナガハシゴケ
葉はせまい卵形で先は徐々に細くなって鋭頭，やや凹み，長さ 1-1.5mm

亜硫酸ガス濃度（年平均）と出現種の関係　（Taoda, 1972 を改編）

区域Ⅰ	0.05ppm 以上	たいへんよごれている	なし
区域Ⅱ	0.04-0.05ppm 以上	↓	コモチイドゴケ、サヤゴケなど極わずか
区域Ⅲ	0.02-0.04ppm 以上	↓	コモチイドゴケ、サヤゴケがごく普通の他 1-2 種を加える程度
区域Ⅳ	0.01-0.02ppm 以上	↓	ヒロハツヤゴケ、コケハイゴケ、ナガハシゴケ、ヤマトヨウジョウゴケなど一カ所で 4-5 種
区域Ⅴ	0.01 以下	きれい	カラヤスデゴケ、イワイトゴケ、ラセンゴケなどを含む一カ所で 5 種以上

（引用文献）Taoda, H. 1972. Mapping of atmospheric pollution in Tokyo based upon epiphytic bryophytes. Jap. J. Ecol. 22(3): 125-133.
（参考ウェブサイト）学校のこけプロジェクト（大阪市立自然史博物館）　http://www.mus-nh.city.osaka.jp/npo/koke/index.html

達ちゃんが語る

子どもたちに伝えたい「源流学」 ②茶摘み

お茶の生産地で知られる奈良は、5月に入ると茶摘みが始まるが、わが家でも毎年5月下旬ごろに、茶摘みを行う。昔はどこの家でもそうだが、自分のところで飲む分（お茶）は自分のところで作っていたが、今は高齢化で、茶摘みを辞めてしまった家も多い。

写真1

茶摘みを手伝うようになったのは小学校の高学年のころで、かれこれ70年近くなる。そのころは家族総出で、2週間ぐらい茶を摘んで、蒸して、揉む作業をやっていた。今は、家の前の垣根にある分を摘んで作業するぐらいで、だいたい1日あったら大まかな作業が終わる。それでも茶色の米袋（30kg入り）、2袋分はとれるから、昔はどれくらいの量を作っていたかは定かでないけど、お茶を揉むときは近所同士の助け合いで、学校から帰ると「今日は○○さん家の茶揉みだから」と、よく手伝いにいったのを覚えている。昔はどことも、かなりの量のお茶を栽培していたと思う。

父親は作業に加わってなかったから揉む作業はずっとわしがしてきた。揉めば揉むほど美味しいお茶になるから、お茶を入れた茶袋を回すようにしてよう揉んだ。茶を揉まったら、うまいぞ。うまいけど茶摘み（写真1）は別もんで、ずっとおかちゃん（嫁）がしてきてくれた。ここ数年、ようやくわしも手が空くようになってから茶摘みをするようになっただけで、茶摘みはまだまだ1年生や。

写真2

茶摘みのときは、指先に白い布を巻き付け、古い葉を除いてすべらせるようにして茶の葉をとる。摘んだお茶は、水を少し入れた大きな鍋でから煎りし（写真2）、茶袋に入れて、熱いうちによく揉む。昔はから煎りせずに、筒のような蒸し器の真ん中に棒を立て、ぎゅうぎゅうにお茶の葉を摘めたものを蒸して揉んでたけれど、いつのころからか、おかちゃんが違う集落で、から煎りする方法を教えてもらってからは、ずっとこの方法でやっている。こっちの方が楽に早く作業ができるから、この方法に定着したんかもしれへん。しっかり揉んだ後は天日干しをして出来上がり。飲む前にもう一度から煎りしたら香りもよう出て、美味しいお茶になる。

昔は新芽だけでなく二番目に出てくる茶葉もとってたけど、いまはたくさん作らなくてもいいから新芽の一番茶だけで作ってるから、ぜいたくなお茶や。不思議なことにお茶の新芽は柔らかくて、天ぷらにしたら美味しいのに、鹿は食べへん。玉ねぎの新芽は全部食べたのに、お茶は苦いのか食べへんおかげで、毎年お茶が作れてるんやなと思う。

※連載では、「聞き書き」でコミュニティライターの西久保智美が担当します。

その十四 吉野の古代寺院 比曽寺

歴史担当の成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します。

大淀町比曽の世尊寺は、吉野郡内で唯一飛鳥時代まで遡る歴史を持つ寺院です。

聖徳太子が創建したとされる46ヶ寺の一つにも数えられ、創建当初は「吉野寺」「比曽寺」と呼ばれていました。平安時代の昌泰元年（898年）には宇多上皇、寛弘四年（1007年）には藤原道長が参詣しています。また南北朝時代には後醍醐天皇により「栗天奉寺」の寺名を賜り、南朝の拠点の一つになるなど、吉野の重要な寺院として存続していました。

境内には東西の塔跡基壇や多数の礎石が残されており、古代寺院の景観を良好に留めています。その重要性から昭和2年（1927年）には「史跡比曽寺址」として国史跡に指定されました。

写真1　比曽寺東塔跡　東塔は豊臣秀吉によって伏見城（京都市伏見区）に移され、その後、園城寺（滋賀県大津市）に移築されました。現在、重要文化財に指定されています。

飛鳥時代に創建された寺院は、天皇や皇族の宮が置かれていた明日香村・斑鳩町周辺に集中していますが、比曽寺は山深い吉野郡内に建立されています。しかし7世紀前半には塔をはじめとする伽藍が完成していたようで、これは明日香村や斑鳩町の諸寺院と比べても遜色ありません。

写真2　比曽寺東塔跡の礎石　柱を置く丸い部分の横に四角い作り出しが刻まれた類例が少ない形をしています。

創建時期の記録はないものの『日本書紀』欽明天皇十四年（553年）五月条には、大阪湾に光り輝く楠が漂着し、その楠で作られた由緒ある2体の仏像が「吉野寺」に安置されていることが記されています。また、明日香村の飛鳥池遺跡からは「吉野」という寺名が記された木簡も発見されています。境内からは7世紀後半頃の瓦が多数出土し、史跡隣接地からは寺院造営に関わる施設とみられる大規模な遺跡も確認されています。これらのことから比曽寺は天武朝（673～689年）頃にも重要な寺院とみなされ、大規模な整備が行われたと考えられます。

写真3　比曽寺西塔跡から吉野の山々を望む。

ただ、由緒ある仏像を安置する寺院が、山深い吉野郡内にかなり早い時期に創建され、その後も大規模な整備が続けられたのか明確な答えは出ていません。

比曽寺は竜門山地から南に向かう緩やかな斜面に立地しているため、境内から南方に広がる大峰山系の雄大な山並みを望むことができます。観光地化もされていないので古代の寺院跡の雰囲気をとても感じることができます。

境内を散策しながら、この場所に古代寺院が建立された意味を推理してみるのも面白いかも知れません。

写真4　春の比曽寺跡。境内は地元の人たちの憩いの場になっています。

参考文献：
堀池春峰「比曽寺私考」『奈良縣綜合文化調査報告書　吉野川流域』奈良県教育委員会　1954年
達　日出典『奈良朝山岳寺院の研究』名著出版　1991年
大淀町教育委員会編『平成17・18年度大淀町文化財調査報告―史跡比曽寺跡・大淀桜ヶ丘遺跡―』奈良県大淀町文化財調査報告第4集　2008年

川上村のヘビについて

井手　泉（源流人会会員）

森と水の源流館では、７月13日から９月８日までヘビをテーマにした企画展「巳」を開催します。そこで、今回から２回に分けて、企画展の展示協力をいただいた、井手泉さんに川上村のヘビについて紹介していただきます。

1．アオダイショウ（成体）

1．はじめに

ふだん多くの人に嫌われ、世の中からは遠ざけられている蛇（ヘビ）ですが、今年は巳年、ヘビが12年に１回だけ脚光（？）を浴びる年なので、ここにも登場してもらうことになりました。この機会にヘビにまつわる偏見、迷信や誤解から自由になっていただき、少しでも彼らに親しみを持っていただければと思い、今回は日本本土に生息する８種類のヘビの内、川上村においてもごく普通に見られる４種を選んで紹介したいと思います。また一方、“自然の象徴”としてのヘビについて、筆者のかねてからの思いの一端も少しだけ述べさせていただきますので、両方が相まって、ヘビという動物への正しい理解に至るためのきっかけとなり、端緒ともなれば幸いです。

2．川上村の普通種・４種の概要

（1）アオダイショウ（ナミヘビ科）

日本本土のヘビでは最大で全長100-200cm。成体の背面はオリーブ色がかった青っぽい地に、黒ずんでぼやけた４本の縦条があるのが普通です。まれに条線のはっきりしたものも見られます。幼体の体色は、成体とは異なり、白っぽい灰色もしくは白っぽいベージュの地に、濃褐色の梯子状の横斑があるので、大概の人は他種のヘビと思ってしまいます。成長するにつれて、この横斑の左右両端が前後に伸びて縦条となり、体色も緑がかってきます。成体の主食はネズミやモグラなどのほ乳類と鳥類ですが、トカゲやカエルなども食べます。本種の特技は木登りで、枝のない幹の部分でも、腹鱗の角を樹皮のくぼみなどにひっかけて垂直にはい登り、小鳥や卵を食べます。本種はニワトリの卵も飲み、その時にはくわえ込んだ鶏卵がノドの奥まで来ると、背骨の突起を卵に押し当て、前後の筋肉で締めつけて卵を割って胃へ送るため、３～４個の卵でも楽に飲むことができます。アオダイショウは高いところから自分で落ちて卵を割るといわれますが、それは根拠のない俗説です。

2．アオダイショウ（幼蛇）

本種は、昔は人家や納屋にも住みついて、ネズミをよく捕ってくれたので「家の主」とか、「神様の使い」とかいわれ大切に保護されましたが、最近はヘビをやみくもに殺す悪習慣と自然環境の変化（原因は人間による環境破壊）によって個体数が減少しています。特に大型のネズミを何匹も飲める200cmクラスのものはめったに見られなくなりました。しかし、自然の豊かな川上村には生息している可能性があります。

3．卵を飲み込んだアオダイショウ

（2）シマヘビ（ナミヘビ科）

各地でよく出合う日本本土の固有種で、川上村の吉野川源流域にもたくさんいます。成体の全長は80-150cm。わら色または褐色の地に黒褐色の４本の縦条があるのでわかります。ところが、体色に変異があり、「普通型」のほか「黒化型」（いわゆるカラスヘビ）と「無条型」の３つのタイプがあります。川上村でもこれらの３型が確認されていますが、「黒化型」は少ないです。そして特に注目したいのは「無条型」のシマヘビで、このタイプは４本の縦条がなく（または目立たず）、むしろ横斑の方が目に付くことが多いため、他種のヘビ（ヤマカガシ、アオダイショウやジムグリ）と見まちがえられる可能性が高いです。ですから、判別には十分に気を付けてください。

シマヘビの決定的な特徴は「眼」にあります。眼の虹彩の部分が赤く、瞳を明るいところで見て縦楕円形をしていればシマヘビです。幼体の体の色は成体とはまったく異なっていますが、虹彩の部分が赤いことでわかります。

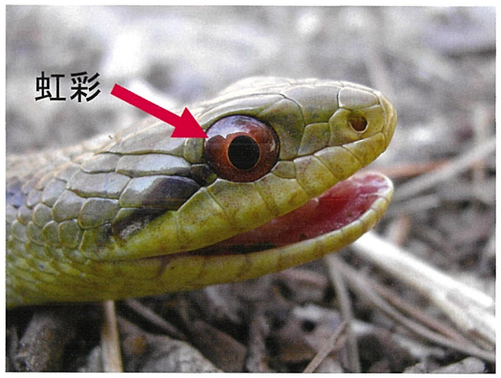
本種は気性が荒く、追いつめたりすると前半身を持ち上げ、頭を三角形にして首をＳ字型に曲げて威嚇し、さらに近づくと咬みつくことがあります。このため、マムシと間違える人が多いですが、追いつめたりしなければ、向こうの方から攻撃してきたり、追いかけてきたりすることはまったくありません。漠然とした恐怖心や被害妄想は片づけて、むしろこちらの方が相手に恐怖を与えないように気をつけることが肝要です。

（つづく）

4．シマヘビ（普通型）

5．シマヘビ（黒化型）

6．シマヘビ（無条型）



7．シマヘビの虹彩